

## SRID 活動報告

### 「国際開発プロフェッショナルコース」実施報告

藤村建夫・佐藤桂子  
キャリア開発事業運営委員会

「キャリア開発事業」の新規事業として、2021年6月19、20日の2日間、「国際開発プロフェッショナルコース」を ZOOM 方式で開催した。SRID のキャリア開発事業は従来国際開発機関への就職を希望する人たちへのカウンセリング及び要望に応じた出張講義が主であったが、このコースは SRID 自前の講義として、国際機関での実際の業務内容を講義及び議論するものである。目的は、近い将来世界銀行や国連機関で働きたいと考えている人たちに対し、すぐに役立つ「開発援助の枠組み作成」や「開発プロジェクトの運営管理」手法を提供する事であった。外務省や諸大学で行われている「国際機関への入り方」を受講した人たちにも、「入った後」どのような仕事を実際にするのかを理解してもらう事を主眼とした。

#### ハイレベルの受講者

募集は専ら既存のウェブサイトや SNS を活用した。募集資格を 1)実務経験 3 年以上、2) 講義をすべて英語で行うため英語能力を TOEIC860 点以上、または TOEFL80 点以上とし、14~16 名を募集したが、最終的に 13 名が受講した。受講者の英語能力は予想以上に高く、平均では TOEIC は 950 点、TOEFL は 95 点であり、国際機関での勤務に十分耐えられる英語力であった。また、受講者の教育レベルも高く、8 名は修士号をすでに保有し、3 名がこの秋に修士課程への海外留学が決定しており、残り 2 名はすでに海外の大学院修士課程に在籍して、遠隔授業を受講中の状態であった。

#### 研修コースの概要

研修コースは 6 月 19 日に「世銀の国別パートナーシップ戦略とキャリア開発」、20 日に「国連機関のプロジェクト運営管理」を以下の通り実施した。受講者は事前に配布された資料を読み込み、当日の議論に備えておくこと、また採用関連の宿題としては、自分が受けた国際機関のポストを探し、模擬インタビューの準備をすることが宿題として出された。研修講師は以下の 4 人の SRID 会員が担当した。

##### 世銀の国別パートナーシップ戦略とキャリア開発コース

佐藤桂子：元世界銀行ベトナム担当局ポートフォリオ・マネジャー

村井暁子：元世界銀行人事部上級人事担当官

##### 国連機関のプロジェクト運営管理コース

和気邦夫：元 UNIFPA 事務局次長

藤村建夫：元 UNDP 南南協力部シニア・アドバイザー

## 1) 世銀の国別パートナーシップ戦略とキャリア開発 (佐藤、村井)

本コースは、世界銀行の役割を理解し、世界銀行職員が途上国に対して借款を提供する際に、世界銀行としていかなるパートナーシップ戦略を策定し、援助の枠組みを決定するか、その手法を学習すると共に、世界銀行に応募する時の書類作成と面接の心得を修得することという二つのことをネライとしていた。

- 「国別パートナーシップの作成手法」は3セッションに分けられ、最初に多国間助機関としての世銀の役割、ついでプロジェクト選定の基礎となる国別パートナーシップ戦略の策定経緯を理解し、プロジェクトがどのように選定されるかが議論された。
- 第2セッションでは、戦略がどのような経済社会分析・部門分析に基づいて策定されるか、その背景を学習し、戦略の妥当性を議論された。
- 第3セッションにおいて、受講者は、2グループに分かれて、世銀として限られた援助資金を、戦略的にどのセクターにいくらの資金を投入するかを選択を行ったうえで、ベトナム国首相が主宰する模擬 CPF 検討会議を開催し、世銀と他ドナーとの検討会議が演習された。
- 第4セッションでは、「世銀職員の採用と応募方法」について、2018年版の「Recruitment Guide Book」を使って、世銀の職員採用が説明され、これに応募するために必要な留意事項について、講義がなされた。この後で、事前の宿題になっていた、国際機関の職員募集要項の中から選択した、「応募したい Post」への20分間の「模擬インタビュー」を行った。その後、インタビューでの心得や想定される質問等にかに的確に回答すべきか、重要なコツを教授した。受講生にとっては、世銀の採用担当官であった村井講師のインタビューで、初めてインタビューを受けることで緊張していたが、質問に対して簡潔に要点を説明すること、自信をもって自分の能力をアピールすることの重要性を認識させられ、良い経験となった。

## 2) 国連機関のプロジェクト運営管理 (和気、藤村)

本コースは、国連機関職員が途上国に対して技術協力を提供する際に、国連機関としていかなる援助戦略に基づいて、開発協力プロジェクトを立案し運営管理すべきか、その手法を修得するとともに、プレゼンのスキルも修得することをネライとした。受講者は事前に配布された資料と事例教材を読み込み、予め想定された「自分自身が UNDP 職員になったつもりで、提出された事例のドキュメントに対して的確な助言を用意」して、当日の議論に備えておくことが宿題として課された。

- 第一セッションでは、最初に国連システム全体の構成を説明したうえで、援助対象となる途上国に対する国連機関共通の援助戦略の枠組みである United Nations Sustainable Development Cooperation Framework (UNSDCF)の作成方法が教授された。次いで、講師が UNICEF 事務局長を務めたナイジェリアの UNSDCF を踏まえて、現実の諸問題を考慮し、国連が一つにまとまって、何をどのように援助しようとしているのか、その援助戦略の枠組みのネライと効果について討論が行わ

れた。最後に講師自身の経験に基づいた、国連機関職員になるために、どのような素養と能力が必要とされているかが話され、第四セッションの布石となった。

- 第二セッションでは、国連開発計画(UNDP)が実施するプロジェクトの運営管理手法について説明がなされた上で、事例として、東南アジア諸国の農業生産性向上のための持続的農業技術共有プロジェクトのProject Document(PD)を取り上げた。受講生は、自身が UNDP 職員担当者として、NGO が提出した PD の素案に対して、特に、Strategy と Project Results and Resources Framework(PRRF)との関係について、改善するための的確な助言を与えることを求められた。受講生は宿題で準備した各自の助言案を持ちより、二つのグループに分かれて、30 分間、助言の成案を作成するワークショップを行った。次いで、成案をパワーポイントに記述して、発表者がプレゼンを行った。これらの発表に対して、講師がそれらの妥当性についてコメントを与えると共に、望ましい助言内容の例を提示して、グループの助言内容と比較した。
- 第三セッションでは、C 国の農村開発プロジェクトを事例として取り上げた。ここでは、Strategy と PRRF との関係において、特に「Post conflict stage」から「Development stage」に局面が変化する過程において、どのように戦略を変化させるべきかが教授された。受講者は二つのグループに分かれて、事例の宿題を持ち寄って、現地チームが提出した PD の素案について、40 分間、UNDP 職員として、的確な助言を行うための改善案を議論するワークショップを行い、成案をパワーポイント 3 枚以内に記述した。
- 第四セッションでは、「プレゼン・スキルの質を高めるには？」が教授され、その後、二つのグループがそれぞれの助言内容のプレゼンを行った。これらのプレゼンについて、前述のプレゼン手法に基づいたコメントを相互に行った。続いて、講師が二グループのプレゼンの助言内容に関して、個別のコメントを行った後、望ましい助言内容の例を提示して、グループの助言内容と比較した。
- 最後に、国際開発プロフェッショナルに求められる 3 つの能力: 1) 専門的能力、2) マネジメント能力、3) 個性的な能力 について、講師が説明した後、質疑応答が行われた。

### カウンセリングの実施

受講者全員に対して、研修終了後に個別のキャリア・カウンセリングを実施した。カウンセリングは、受講者一人一人に相談内容を予め事務局に送付してもらい、その専門分野・経験と将来についての相談内容を検討して、もっとも適切と思われる人を「SRID キャリア開発塾」の講師の中から選出して対応した。カウンセリングの内容としては、以下のような専門性と進路に関わる相談が多かった。

相談内容の例：

自分の専門性の高め方、自分の専門分野を活かした国際機関のポスト；途上国での経験を積むためのプログラム；JPO 以外の海外派遣の可能な選択肢等

カウンセリングした後のフォローアップは、SRID ホームページのキャリア開発事業の

カウンセリングでフォローすることになっている。今回の受講生の中から将来の国際機関職員が誕生することを強く願っている。

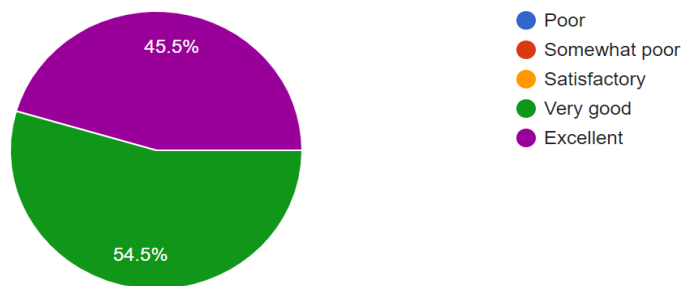
### 研修に関する受講者の評価

研修内容については、受講者から以下のような高い評価を得ることが出来た。

1) 全体として研修をどう評価するかという問いに対して、11名中、非常に良いが54.5%、素晴らしいが45.5%であった。

How do you evaluate the course overall?

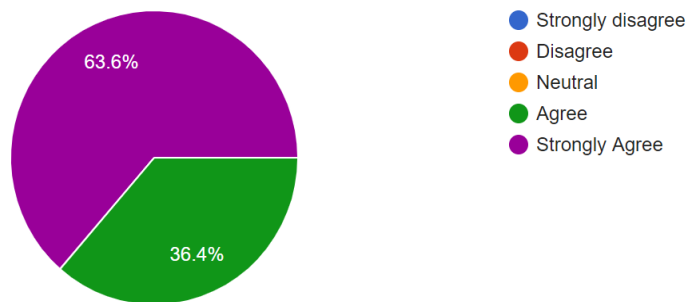
11件の回答



2) 講師による講義は効果的であったか、という問いに対しても以下の通りの結果であった。

Lecturers were effective.

11件の回答



記述式の評価では、社会人対象のコースには事前学習の量が多すぎる点、事例教材が必ずしも適切ではなかった点、週末2日間の集中講義ではなくもっと分散させた方がいいなどの有益な意見が寄せられたので、以後の研修計画に活かしていきたい。

### 研修コースの特色を活かした今後の対応

本コースは次のような特色を持っている。

- 事前学習、本研修、事後の個別カウンセリングと3つのセグメントからなる研修コースは、国際機関で働くことを希望している若い人材を多面的かつ長期的に支援す

ることが出来る。

- 世界銀行と国連機関勤務経験者である講師が、自らの経験に基づいて、研修教材を選択・開発し、研修をすべて英語で行い、演習も実例に基づく教材を活用したことで、国際機関で働く臨場感が得られた。特に事例教材は、現在の援助戦略を用いたものに加えて、過去のプロジェクトを研修のために、現在使用されているドキュメントのフォーマットに改訂して、最新版として開発されたものを用い、実践的なものとなっている。
- 国際開発協力の実際の協力の枠組みやプロジェクトの事例を用いた講義と演習を少人数でインテンシブに行ったため、受講者にすぐに役立つ知識が身につくと思われる、かつ就職の準備やプレゼン能力向上のための知識も得られた。

今回は上記の特色を持った、初めての研修であったが、受講者からも、より効果的な研修を実現するために有益な示唆が寄せられた。同時に、講師自身の体験からも以下のような教訓が得られたので、これらを活かして、次回には、より多くの若い人達が国際機関で働くことが出来るよう、一層効果的な研修を実施していきたい。主たる教訓は以下のものであった。

- 社会人の忙しい時間繰りを勘案し、週末の集中講義ではなく土曜日だけの講義や、数回にわたる講義シリーズを考慮したほうが良い。
- 事前学習については、リーディングの量がやや多すぎたきらいがあったようで、社会人の仕事時間とのバランスを考慮し、適切な量かつ効果的な資料を学習させるようにすべきである。
- 現職の職員からの話があれば、ロールモデルをイメージしやすいというコメントもあったことなどを勘案し、現場で働いている職員からの講義も入れ、臨場感をもたせるべきであり、またケーススタディなどは可能な限り最新の物を使う方がいいと思われる。
- 受講者のこれまでの国際開発分野の知識と経験には、かなりばらつきが見られたので、教材は現在使われているものを使用し、その教材がどのように現場で使われるのか、また職員がそうした教材をどのように活用していくのかという点を取り入れるべきである。
- やはり、ZOOM方式では、受講者間の意思疎通とまとめを作成する段階で、限界があることが分かったが、東京在住でない受講者でも参加できるメリットもあるので、対面と組み合わせる方法も考慮していきたい。
- さらに受講者同士が自発的にネットワークを作り上げ、お互いに情報交換することで励まし合おう、という意気込みを目にすることもできた。これらは講師として大変満足のいく結果であった。